

令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

ゲームに関連した生活障害等の問題、併存する疾患及び
その対応等の実態把握に資する研究（24GC1014）

小学校低学年向けゲーム依存評価尺度の開発と全国調査の準備

研究分担者 井上 建
獨協医科大学埼玉医療センター

研究要旨

小学校低学年児を対象としたゲーム依存評価尺度（IGDS9-SF-JC）を新たに開発し、その信頼性・妥当性を検証した。良好な内的一貫性と構成概念妥当性が確認された。さらに、全国調査に向けて 287 施設から協力の同意を得た。

A. 研究目的

A. 研究目的

本研究の最終的な目的は、ゲームに関連した問題を扱う専門医療機関や相談機関（精神保健福祉センター等）を対象に全国調査を行い、患者のゲーム行動の特徴、社会的背景、併存疾患、対応法などの実態を把握することである。これらのゲーム関連問題には年齢による差異があると予想されるため、18歳未満と18歳以上の区分で比較検討を行う。

この目的達成のため、令和6年度は以下の2点を実施した。

1. 小学校低学年のゲーム行動の問題の評価尺度（IGDS9-SF-JC）の開発
2. 全国調査に向けての準備（調査対象機関の選定および倫理審査申請）

B. 研究方法

1. IGDS9-SF-JC の開発

IGDS9-SF-JC をもとに小児科学・小児精神医学・臨床心理学の専門家3名が質問紙を作成し、小学校教諭2名と協議・修正のうえ、小学校低学年向けの評価ツール（IGDS9-SF-JC）とした。千葉県内の公立小学校1校の全校生徒590名を対象にWebフォームで調査を実施した。併せて、年齢・性別・ゲーム利用状況・生活習慣（食事、睡

眠等）も収集した。

信頼性・妥当性を評価するため、Cronbach の α 係数および確認的因子分析（CFA）を実施し、因子負荷量と GFI, CFI, NFI, AGFI, RMSEA, SRMR などの適合度指標を算出した。

統計解析には、GraphPad Prism（9.5.0）と RStudio（3.6.0）を用い、記述統計、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定、Spearman の相関分析を行った。

（倫理面への配慮）本研究は、当施設の臨床研究倫理審査委員会の承認（研究番号 22042）を得て実施した。回答する児童と保護者には事前に書面で本研究の目的を示し、同意が得られた方にのみ調査を依頼した。

2. 全国調査に向けての準備

分担研究者が所属する小児神経学会および小児心身医学会のメーリングリストを活用し、ゲームに関連する問題の診療に従事しており、メールでの連絡に同意する医師を募った。倫理審査の申請は、報告者が所属する獨協医科大学埼玉医療センター臨床研究倫理審査委員会へ申請した。

C. 研究結果

1. IGDS9-SF-JC の開発

557名（94.4%）から回答を得、無効回答を除外

した 525 名 (89.0%) のデータを解析対象とした。

IGDS9-SF-JC の総スコアは以下の通り：平均 16.6、標準偏差 6.34、中央値 15、歪度 0.96、尖度 0.86。

9 つの設問項目における Cronbach の α 係数は 0.849 で良好な内的一貫性を示した。CFA の結果、因子負荷量は 0.481~0.723 で全項目が 0.4 以上。GFI=0.942、CFI=0.931、NFI=0.916、AGFI=0.903、RMSEA=0.085、SRMR=0.049 と、適合度はおおむね良好であった。

総スコアは、電子機器所持者 > 非所持者

($p < .001$)、男児 > 女児 ($p < .001$)、朝食未摂取者 > 摂取者 ($p < .05$) で有意差があった。また、ゲーム時間・動画視聴時間・就寝時間と総スコアとの間に正の相関を認めた ($r = 0.27 \sim 0.49$)。起床時間、勉強時間、欠席日数、年齢には相関を認めなかった。

2. 全国調査に向けての準備

287 の医療機関（主に小児科・精神科）から調査協力の同意を得た。地域・施設種別を今後の分析に活用予定。また、2025 年 1 月に臨床研究新規審査依頼を行い、同年 2 月に臨床研究倫理審査委員会より承認された。

D. 考察

1. IGDS9-SF-JC の開発

作成した IGDS9-SF-J 低年齢版は十分な内的一貫性を認め、CFA での適合度指標も良好だった。総スコアとゲーム利用時間には正の相関があり、Halley et al.(2015)と同様の結果が示された。また、IGD と睡眠の問題については関連があると報告されている(Rehbein et al., 2015)が、本研究

でも総スコアが高いほど就寝時間は遅く、それらの関連性が示唆された。これらの結果から、IGDS9-SF-J 低年齢版は小学校低学年児童を対象とした IGD の評価ツールとして有用であると考えられた。

2. 全国調査に向けての準備

ゲーム行動に関する臨床的関心は限定的と考えられていたが、今回の募集では 287 施設の協力が得られたことは注目に値する。全国的な実態把握と年齢別の比較解析に資する十分なサンプル確保が見込まれる。

E. 結論

小学校低学年向けのゲーム行動評価尺度 IGDS9-SF-JC は、十分な信頼性と構成概念妥当性を有し、若年層におけるインターネット・ゲーム依存傾向のスクリーニングに有用であることが示された。また、令和 7 年度に実施予定の全国調査に向け、287 施設から調査協力の同意を得ており、倫理的準備も整った。今後、年齢群間の比較を含む全国的な実態調査を通じ、より有効な支援策の構築が期待される。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表 特記なし
2. 学会発表 特記なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし